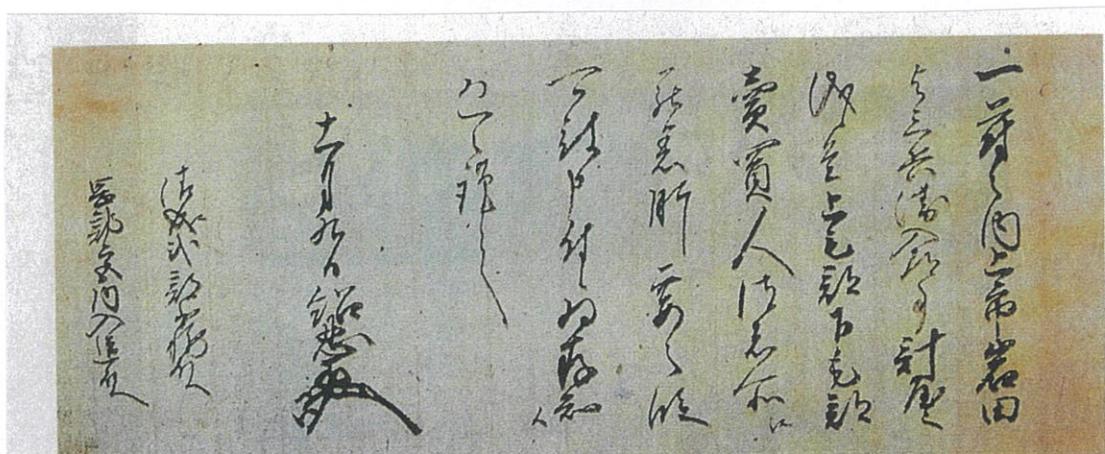


連載「大友時代を生きた人々」

国際文化学部鹿毛敏夫教授の 「田原親賢(紹忍)～筑後・肥前・豊前の『方分』を兼任～」が掲載

●大分合同新聞朝刊 2022年6月24日(金)



田原紹忍(親賢)書状(蠟瀬文書)

田原氏は、志賀氏や一万田氏らと並ぶ豊後大友氏の有力庶子家の一つです。大友氏初代能直の子泰広を始祖として、豊後国北部の国東地方に勢力を持ち、大友宗家歴代当主を支え、時には宗家と対立して乱を起すなど、400年の大友時代の中で極めて大きな力を持つ一族でした。

特に戦国期の当主田原親宏は、大友義鑑・義鎮(宗麟)の時期に勢力を強め、豊前・

筑前方面での合戦に出陣して戦功を挙げます。一時は大友氏をしお力を有しているとされた親宏でしたが、その強化を恐れた鎮が田原本家を抑圧。親宏は天正7(1579)年に病死しました。跡を継いだ養子の田原親貢も、翌年、大友氏の後継介入を嫌つて謀反を起こし鞍懸城(豊後高田市)にこもりますが、大友軍の攻撃によって陥落。田原氏の嫡流は絶し、その跡は、大友義鎮の子親家が繼承しました。

大友氏によつて勢力を削減された田原本家の一方で優遇

大友時代を 生きた人々

鹿毛 敏夫

田原親賢(紹忍)



筑後・肥前・豊前の「方分」を兼任

田原紹忍(親賢)書状(蠟瀬文書)
(1570年代)に出した書状が、豊前国下毛郡の領主蠟瀬氏の元に残っています。

その親賢が、天正年間前半

条入道の事、計屋の儀に候

衛上毛郡・下毛郡の賣買人

「一符の内上山石田与三兵

大友氏によつて勢力を削減

された田原本家の一方で優遇

されたのが、分家の武藏田原氏でした。豊後国安岐郷にある奈多八幡宮(杵築市)の大宮司で大友氏の寺社奉行を務めた奈多鑑基の子で、武藏田原氏の養子となつた田原親賢(入道名紹忍)は、特に大友義鎮・義統父子の信頼を得て、政権内で権力を振るいました。

戦国期の大友氏は、「加判衆」と呼ぶ権力の中枢にある重臣が、豊後以外の国単位で行政・司法・警察・軍事指揮の各権限を担当する「方分」

という統治体制を敷いています。中でも田原親賢は、筑後・肥前・豊前の3カ国の方分を兼任していたと思われます。

その親賢が、天正年間前半(1570年代)に出した書状が、豊前国下毛郡の領主蠟瀬氏の元に残っています。

「一符の内上山石田与三兵

衛上道の事、計屋の儀に候

条上毛郡・下毛郡の賣買人

「一符の内上山石田与三兵

大友氏によつて勢力を削減

された田原本家の一方で優遇

は、彼の者の所へ罷り著き
肝要の段、申し付けらるべく
候

豊後府内の上市町の岩田与
三兵衛入道が大友氏公認の計
屋商人であるので、豊前國上
毛郡・下毛郡からの商売人が
府内で商取引を行う際には、
まず岩田氏の元に荷降ろしを
せよ、との大意です。

16世紀後半の日本では、商
取引の決済が銀で行われてい
ました。しかしながら、この
時代に銀を計量するはかりや
分銅は、地域によって規格が
異なります。そこで、北部九
州一帯に領国が拡大した大友
氏は、他国の中人が豊後府内
に来て銀取引をする際の計量
商人を指定して、衡量制の統
一を図ります。その経済政策
の一環として、豊前の方分だ
った田原親賢は、担当する豊
前の商人にこのお触れを出
たのです。

その親賢が、天正年間前半

条入道の事、計屋の儀に候

衛上道の事、計屋の儀に候

条上毛郡・下毛郡の賣買人

「一符の内上山石田与三兵

大友氏によつて勢力を削減

された田原本家の一方で優遇